

# 女子に関する衣服の研究Ⅳ

## 女子服にみられるシルエットの一考察(2)

A Study of Women's Dress IV  
A Study of Women's dress Silhouette (2)

北 村 悦 子  
Etsuko KITAMURA

### I は じ め に

前号では、19 世紀中頃にオート・クチュールの組織が確立した時期から 20 世紀初期までの、女子服にみられるシルエットを現代のファッションとの関わりについて、比較検討をしたが、今回は 1930 年代から現代までの女性達に関心を与えたシルエットを分析する。

第二次世界大戦から 50 有余年経過した現在、ファッションは様々に変化してきたが、一つの流行が生まれるのには、その時期の政治や社会の動きに伴う人間の感性や感情の反映があり、人々はその生活状況を考慮した上でファッションという形として表現している。

また、女性の価値観及び人生観、それらを取り巻く環境によってもファッションの取り入れ方に違いがみられることは非常に興味深いところである。

シルエットの考察をしながら今期流行となっているシルエットをテーマに、その形態を取り上げて作品を製作したので報告する。

### II 変 遷 と 考 察

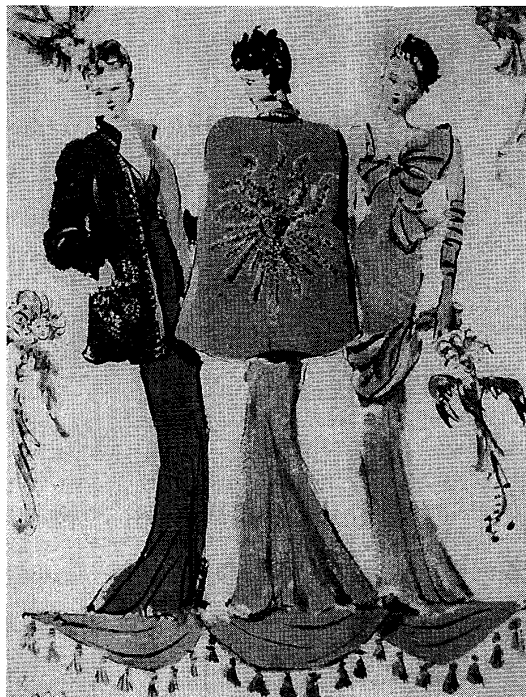
#### 1. 女性らしいシルエット

1930 年代に入ると、20 年代のボーイッシュな“ギャルソンヌ・ルック”に見られたチューブラーなシルエットに変わってドレス丈は一斉に長くなり、モードに復古調がみられ女性の身体の自然なカーブが再び甦り、成熟した女性美を表現するファッションが復活し、シルエットは再び女性らしくなった。

それは、全体が長くほっそりして身体の線に合わせた丈長の「スリム・アンド・ロング・シルエット」(写真<sup>1)</sup>)で、スカート丈も膝下になりボリュームなどは全くなくシルプルで機能的なものであり、「スレンダー・シルエット」ともいわれる。

ウエスト・ラインは自然の位置に戻ったが、コルセットなどで極端に細めることはせず、ブラジャーもエラスティックのソフト素材を使用した軽いもので、胸の輪郭を美しく保つために用いられた。

30 年代の経済は不況の傾向であったが、その状況下でモードに活気を与えた一人の女性がい

写真1 スリム・アンド・ロング・  
シルエット (1932 年)写真2 スキャパレリのイブニング・ドレス  
(1938 年)

た。それはローマ出身のクチュリエール、エルザ・スキャパレリ (Elsa Schiaparelli) である。

彼女は女性の身体の自然な曲線を見捨ててしまった 20 年代モードを真っ向から批判し、広い肩にはパッドを使用し、胸の存在、ウエストを細く明確にしてそれぞれを強調したシルエットを打ち出して新しい試みをした。彼女はジッパーをオート・クチュールに初めて導入したり、様々な型のボタンの使用、さらに色彩的にも原色をよく使用し、その中でもローズ・ヴァイオレットは「ショッキング・ピンク」と呼ばれてスキャパレリの代名詞ともなった。写真<sup>2)</sup>は、スキャパレリのイブニング・ドレスであるがシルエットはスリム・アンド・ロングで、中央の作品はドレスの上に構築的なシルエットのマントが組み合わされている。マントの背中央には大胆な刺繍が施され、色調は彼女の好んだショッキング・ピンクである。

20 年代のギャルソンヌ・ルックは、着用目的は無視されて一日中着いていたのに対して、30 年代になるとその目的に合わせて、夜のパーティなどに着られるイブニング・ドレスはスリム・アンド・ロング・シルエットの、ベア・バック・ドレス（後ろが深くカットされて、デコルテされているもの）と呼ばれ、より一層「女性らしさの復活」の兆しがみられた。

またスリムでロングなシルエットのドレスの上には、スキャパレリの作品にみられるように、ケープやマントをレイアードしたスタイルも多くみられた。

1939 年に始まる第二次世界大戦を前にして、肩にパッドを入れて強調した「ミリタリー・ルック」<sup>1)</sup>が流行した(写真3)。ミリタリーとは軍隊、陸軍調という意味であるが、ファッションではエポーレット(肩章)、ブレード飾り、金ボタン、モールなどを付けて軍服調の要素をデザインに取り入れたもので、スカート丈は膝を隠す程度でシルエットは直線的で完全な機能服である。

## 2. シルエットの変化

1940年代の初期は、まだ戦時下にあったため女性のファッション全体は、引き続き活動的なミリタリー・ルックが主流であって、定まった名称が付けられるようなシルエットはみられなかった。しかし戦後、45年から46年になるに従い、次第にシルエットは再び女性らしいソフトな傾向を見せ始め、時代もファッションも大きく変化し始めた。

ボーイッシュからフェミニンへという願望が強くなりつつあったときに、クリスチャン・ディオール (Christian Dior) がそれに答えるかのように、1947年に極めて女性らしいシルエットを発表した。その作品は「ニュー・ルック」(写真<sup>3)</sup>と呼ばれ、自然な肩ライン、細いウエスト、広く膨らんだロング・スカートで「ボディ・コンシャス・シルエット」(身体を意識するという意味)に類似して、フィット感では共通性が見られる。

ディオール自身のこの作品に対するコンセプトは「戦時中の婦人兵の制服スタイルから抜け出して優雅な肩、豊かな胸、草花の茎のように細いウエスト、そして花のように華やかに広がったスカート<sup>4)</sup>」と述べて女性らしさを強く印象付けている。写真<sup>3)</sup>は当時のディオール・メゾンの作品フィッティング光景である。

ディオールは、ニュー・ルックのシルエットを表現するにはコルセットとブラジャーが不可

写真3 ミリタリー・ルック  
(1939年)



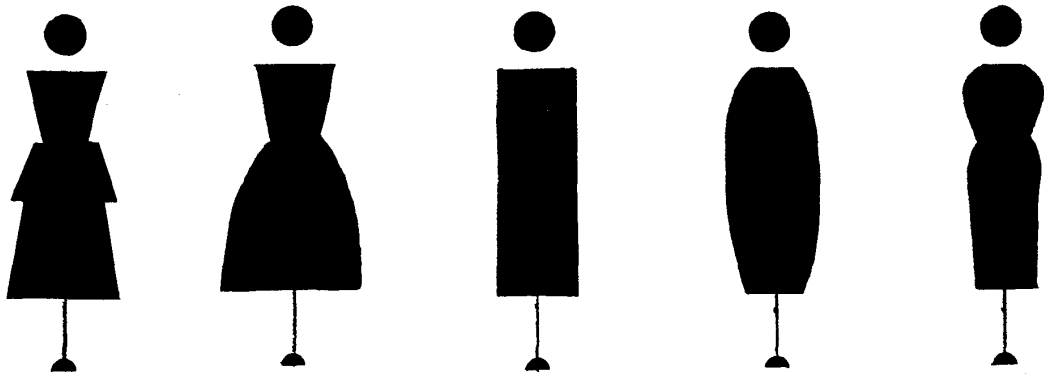
写真4 ニュー・ルック  
(1947年)



写真5 デイオールのフィッティング光景



図1 ジグザグ・ライン (1948年)    図2 ウイング・ライン (1949年)    図3 パーティカル・ライン (1950年)    図4 オーバル・ライン (1951年)    図5 チューリップ・ライン (1953年)



欠としているが、コルセットは昔の物のように鯨骨の入ったもので胸を締め付けるのとは違い、慎重な研究によって軽快な構造を意識し、女性の姿を美しく見せるように考案した。

ブラジャーはブラ (bra) とよばれる真鍮線のソフトなワイヤーで形が造られ、簡単なペチコートも使用された。

復古的傾向をもつこのシルエットは、布地を多量に使用するので、当時の経済面に支障をきたすということで、政府当局者によってデザインを阻止されたが、女性達にとってこの施策はあまり重要視されなかった。それに対して19世紀のクリノリン・ドレスは、布を多く使うほど女性の身分や、その主人の財力をも象徴したが、このニュー・ルックは終戦直後の貧しく味気無い衣生活を送っていた女性にとっては明るい未来を予見するかのようであった。アメリカでは、このニュー・ルックのことを「プレス・テ・キング・シルエット」(ハッと驚くシルエット)と呼ばれるほど、当時としては画期的なものであり、一種のリバイバル・モードでもある。

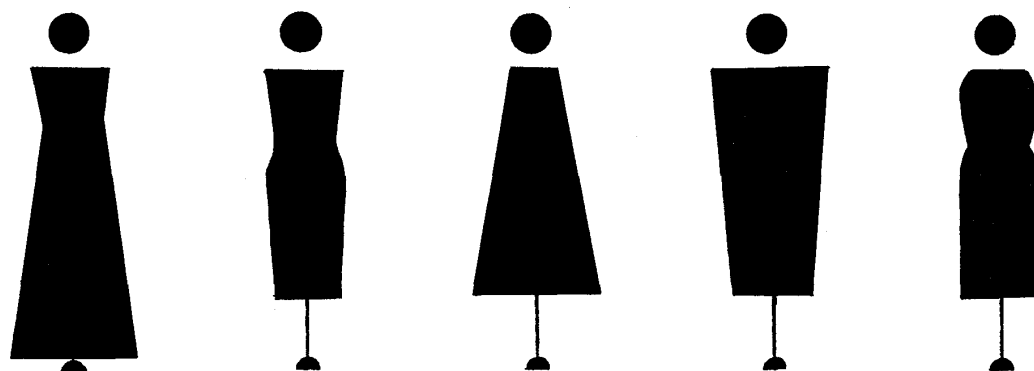
ニュー・ルックの特徴をもつシルエットは、表現方法は異なるがスキヤパレリやピエール・バルマン (Pierre Balmain) など、当時活躍した他のデザイナー達によっても発表された。この時期のコート丈はロング・スカートに対応して長くなった。

日本でもこの頃の時代になるとファッションに関心をもつ余裕が出て、海外からのものを取り入れるようになった。しかしそれは、アメリカの占領下だったためにアメリカ駐留軍の家族達からの情報であり、アメリカ文化の流入によって日本人のファッションに対する意識も変化・発展するようになった。

日本自体も洋装に関して発達の時期となり、ファッション・ブックも、1936年に日本初のスタイルブック「装苑」が創刊され、1905年に創刊されていた「婦人画報」も1947年に復刊、現在は廃刊された「ドレスメーカー」も1949年にと、次々に目で見える資料として発刊され、急速に一般大衆に取り入れられるようになって、洋裁塾が流行する要因となった。

またそれに伴ってデザイナーという新しい職業が確立し、社会的、経済的にも地位が向上して、国内でも認められるきっかけとなる。

図6 エッフェル塔・ライン (1953年)    図7 H・ライン (1954年)    図8 A・ライン (1955年)    図9 Y・ライン (1955年)    図10 アロー・ライン (1956年)



ディオールは1947年のニュー・ルックを発表後、1957年に心臓発作で急死するまでの10年間に次々と女性らしいシルエットに変化をもたせた。

彼の代表的なシルエットを、略図で表現可能なものを年代順にみると、「ジグザグ・ライン」(図1)は、ペプラム、ヘムなどに装飾を施したり、後ろにデザインのポイントを置いたものである。「ウイング・ライン」(図2)は、スカートを翼のように左右の広がり強調したもので、ジグザグ・ラインとともに基本ラインはウエストをマークしたニュー・ルックのシルエットである。

「バーティカル・ライン」(図3)は、垂直なラインで再びスカートにストレートなシルエットの変化がみられ「シース・シルエット」ともいい、袖にデザインのポイントが置かれた。

「オーバル・ライン」(図4)は、長円形のラインで相変わらずスリムなシルエットを基調にしているが全体に丸みをおびて、このシルエットも袖に数多くの変化がみられた。

「チューリップ・ライン」(図5)は、チューリップの花を連想させるもので胸を豊かに、ウエストを細く、下半身をスリムにと造型的なシルエットである。

「エッフェル塔・ライン」(図6)のポイントは、横線の切り替えは無くハイ・ウエストで裾広がりのしなやかなプリンセス・ラインのシルエットで、主にイブニング・ドレスに見られる。

「Hライン」(図7)、「Aライン」(図8)、「Yライン」(図9)は、アルファベットの文字でシルエットを表現しているが、それぞれの特徴としては、Hラインは胸を強調しないストレートでスリムなもので「ロング・トルソー・シルエット」(胴長のシルエット)である。Aラインは肩幅を狭く小さくし、胸もフラットにしてハイ・ウエストでHラインを裾広がり展開したものである。

Yラインは袖付けの操作で胸を高くするなど上半身に幾分ボリュームを感じさせる程度のシルエットである。

「アロー・ライン」(図10)は、Hラインの応用であるが全体に曲線的な柔らかさがみられるが、矢のように上から下まで比較的ストレートなシルエットである。

図 11 マグネット・ライン(1956年)



図 12 スピンドル・ライン(1957年)



「マグネット・ライン」(図 11)は、ウエストを細く、スカートを馬蹄型のマグネット(磁石)のように大きく膨らませてボリュームを出し、裾は狭くデザインしている。

「リバティー・ライン」のリバティーは自由という意味で、「フリー・ライン」ともいわれ、したがって特定のラインを主張せず自由なシルエットと理解する。

「スピンドル・ライン」(図 12)は、シルエット全体に紡錘型の膨らみをもたせて身体の色を隠しているが、トップとボトムの端は若干狭くデザインされ、このラインはディオール最後のものである。このように、次々と

女性的で独創的なシルエットを発表しているが、エッフェル塔・ラインを除いていずれもスカート丈がニュー・ルックよりも幾分短くなっている。

### 3. 解放されたウエスト・ライン

1950年代になると、ディオールと共にこの時期のオート・クチュール界を担っていた、クリストバル・バレンシアガ(Cristobal Balenciaga)も、スリムでストレートなシルエットの「ロング・トルソー・シルエット」のデザインを発表し、その中でもチュニック・スタイル(スリムなスカートの上に、ボックス型で膝上丈のストレートなシルエットのジャケット風ドレスを組み合わせ<sup>5)</sup>たもの)は注目された(写真6)。

また、彼の作品でストレートでありながらルーズなシルエットをもつシューミーズ・ドレスも話題になり、いわば人工的なライン

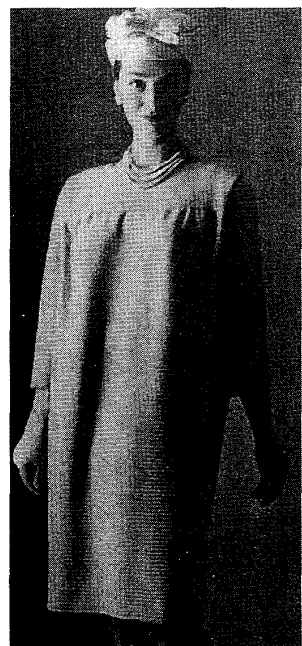
ではなく、自然なラインに戻ったものである。その後も、自然なショルダー・ラインで、ウエスト・ラインに切り替えやダーツがなくずん胴型で、スカート丈は短いワンピース・スタイルになり、サック(袋)のようなシルエットを表現するので、「サックス・ドレス」(袋型の服)(写真<sup>6)</sup>と呼ばれるスタイルが流行した。

このドレスは、全くウエスト・ラインをマークしない筒型の単純なフォルムで、ストレート・シルエットであり、他のデザイナーによってもサック・ドレスのバリエーションが展開され、ま

写真6 チュニック・スタイル(1955年)



写真7 サック・ドレス(1957年)



た、新しさと着ごちの良さと、布地の用尺が少ないため経済的であることから、マス・ファッションとして取り上げられた。

ディオール店の後継者となったイヴ・サン・ローラン (Yves Saint Laurent) が最初のコレクションで「トラペーズ・ライン」(写真8)<sup>6)</sup>を発表した。この作品は、台形の型をしていることから別名「テント・シルエット」ともいわれ、シルエットはAラインの一種で、肩幅は狭く、ルーズ・ウエストで、セミ・タイト・スカート (セミとは半分の意味で、タイトでありながら、腰から裾にかけて少し広がったスカート) のドレスで、シンプルな型をより若々しく表現した。

59年にはサン・ローランが「ロング・アンド・ナチュラル・ライン」を発表したが、それは自然を意識してシンプルなもので、際立った特徴は見られないものであった。

50年も後半になるとモードの大きな特徴はナチュラルなものへの復帰ということになる。

#### 4. ヤング・ファッション

1960年代は高度成長期の始まりで、美術、音楽、演劇などの芸術関係全体がアバンギャルドで大胆な活動が多方面に渡って行われ、社会が成長と発展期であるとともにマス・メディアの発達で情報化社会となる。

ファッション界にとっても50年代の戦後の復興期を足がかりに大きく飛躍した時代となり、ファッションの対象が若者達によって展開されるようになってきた。そのヤング・モードの特徴は大人の女性モードに対立する形で表現された。

それは50年代の終り頃から、ロンドンの若者達が着用していた「ミニ・スカート」(膝上20~30cmの非常に短いもの)<sup>2)</sup>(写真9)を、60年代になってマリー・クアント (Mary Quant) がストリート・ファッションからハイ・ファッションとして取り上げたことによって明確になった。このミニ・スカートのシルエットはAラインを展開したものである。

写真8 トラペーズ・ライン

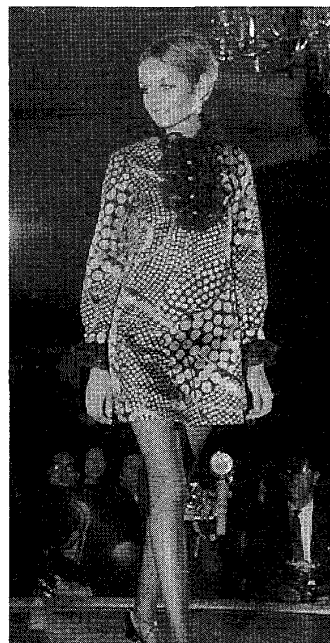
(1958年)



写真9 ミニ・スカート  
(1960年代)



写真10 レスリー・ホーンビー  
(1967年)





それはヤングを中心に欧米で想像以上に受け入れられ、エリザベス女王から、外貨獲得の功績でMBE勲章（5等勲章）を授与されたほどであった。

さらに、ミニ・スカートはロンドンの若いファッション・モデルであるレスリー・ホーンビー（ニックネームはツイギーといい、ツイッグとは小枝という意味で痩せた女性のことである）（写真10）が着たことによってもヤングを刺激し、また1967年に彼女が来日したが、それを契機に我国でも体型に関係なくミニ旋風がおこった。

またアンドレ・クレージュ（Andre Courreges）がオート・クチュールのコレクションでミニの作品を発表して話題となり、彼によってハイ・ファッションであったミニがマス・ファッション化されたために世界中でミニ・スカートはヤングの象徴になった。写真11も彼の作品で、ミニ同様に人気があったホット・パンツ（ショート丈のパンツ）も多くのヤングに愛用され、シルエットは直線的で素材使いに特徴がみられる。そして、このヤング・ルックのモードは、瞬く間にあらゆる年齢層に浸透して行くことになってファッションに風俗革命を起こした。今までのモードの流れは元来上層から

写真11 ミニ・ドレスとホット・パンツ（1967年）

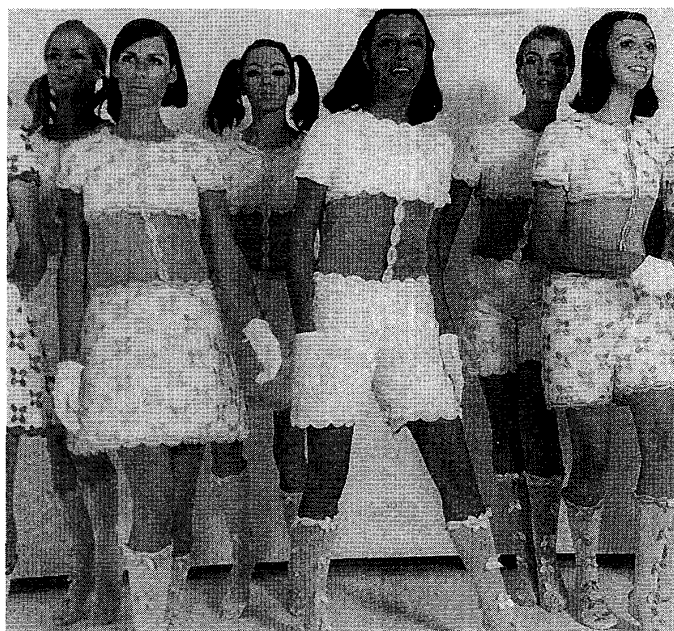


写真12 ニュー・Aライン  
（1967年）

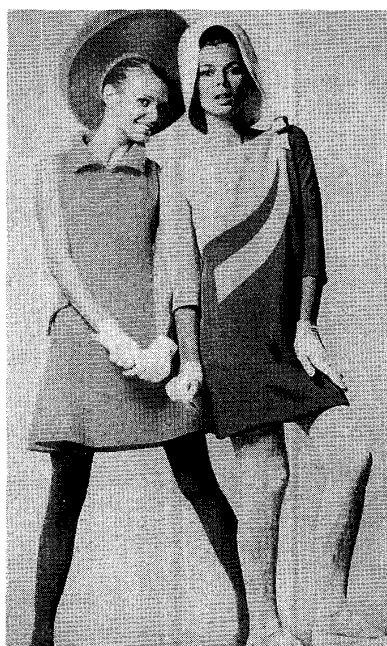


写真13 カルダンの作品（1967年）





下層へ伝達されたが、この頃からは下層から上層に逆流しはじめた。この時期のシルエットは、「ニュー・Aライン」で、特徴はハイ・バスト、ルーズ・ウエスト、超ミニ・スカートで構成されたもので、写真<sup>2)</sup>12のピエール・カルダン (Pierre Cardin) の作品も、そのラインである。

また彼はドレスの一部を円形、角形と様々な形態にカッティングしたり、別布でパッチワークを施すなど高度なテクニックを取り入れ、ベルト使い

によってシンプルなシルエットにアクセントをつけている (写真<sup>8)</sup>13)。

サン・ローランは多くの芸術家達と交流が深く、その影響がファッションにも現れた。それは写真<sup>6)</sup>14の「モンドリアン・ルック」(オランダの抽象画家ピエト・モンドリアンの作品の構図を取り入れたもの)にみられ、大胆な柄に黒で効果的に区切ったドレスのシルエットは、膝をマークしたスカート丈で、直線的でシンプルなものである。写真<sup>6)</sup>15も彼の作品で「ポップ・アート・ファッション」(新写実主義の絵画にみられる構図を取り入れたもの)と呼ばれ、ドレス全体がキャンバスになってい

て、シルエットはやはり直線的な形態である。それらのシルエットはいずれもイージー・フィットのニュー・Aラインの傾向である。

1957年になるとソ連で世界初の人工衛星打ち上げの成功に始まって、翌年にはアメリカでも成功し、さらにソ連で人類初の宇宙飛行も行われたが、そんな世相を反映して、ファッション界でも「宇宙ルック」と称され、カルダン、クレージュらによって作品が発表された。

写真 14 モンドリアン・ルック  
(1965 年)

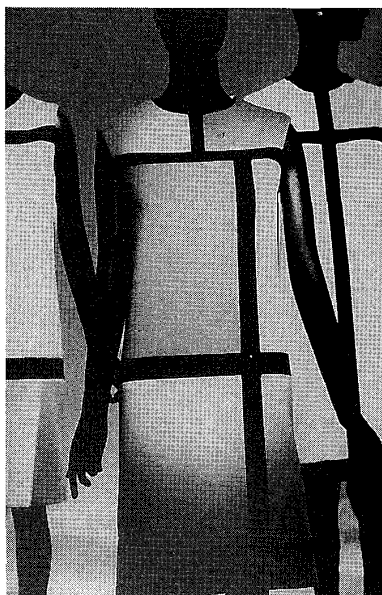


写真 15 ポップ・アート・ドレス  
(1966 年)

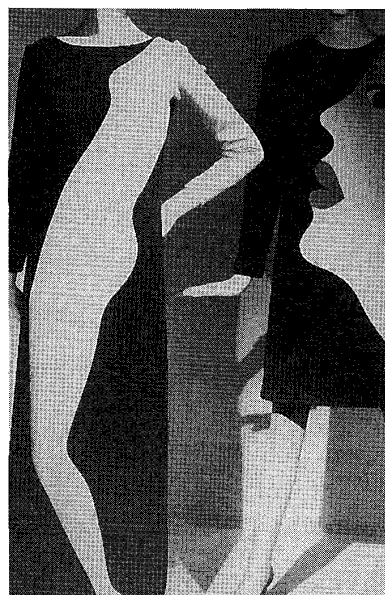


写真 16 クレーージュの作品  
(1965 年)

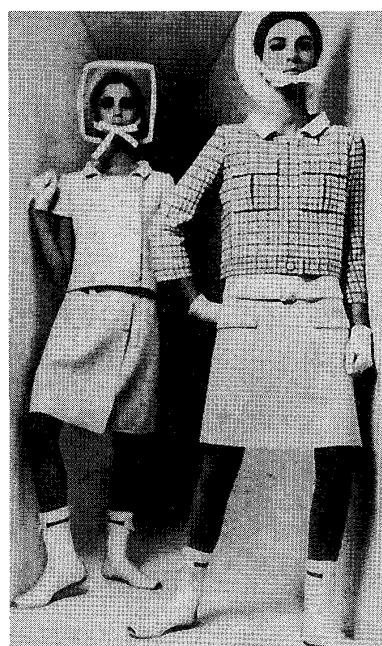


写真 17 カルダンの作品  
(1966 年)



それらのシルエットは未来派感覚のモダンなカッティングを施されたストレートなラインで、大胆な配色使いにも特徴がある。

写真<sup>2)</sup>16はクレージュの作品であるが、帽子は四角くカッティングされ、全体を幾何学的に計算されたラインでまとめられたミニ・ドレスはその代表的な作品である。

写真<sup>8)</sup>17はカルダンの宇宙ルックで、ヘルメット型の帽子に特徴がみられ、身頃には大胆なカットなどを取り入れ、宇宙時代を象徴する感覚がうかがわれる。

また、ルイ・フェロー (Louis Feraud) によってオプティカル・アート (視覚芸術のことで、目の錯覚を利用して、柄や色を幾重にも重ねることで幾何学的な効果をみせること) の作品も発表されているが、シルエットはAライン傾向のナチュラルなものである (写真<sup>1)</sup>18)。

60年代も終り頃になると、スカート丈に変化がみられ、“ミニ” (Mini) (膝上の短い丈)、“ミディ” (Midi) (ふくらはぎまでの丈)、“マキシ” (Maxi) (踝までの丈) と、3Mの時代になった。このへム・ラインの多様化に伴って、超ミニをはいたヤングも、夜のパーティなどには、ドレス丈がマキシ、ミディと幅広いスタイルが取り入れられるようになり、ライフ・シーンを意識してT・P・Oが考慮される時代になった。

新しいファッションとしては、「シー・スルー・ルック」が大変話題をよんだ。いわゆるスケスケ・モードで、透ける素材 (モスリン、ボイル、ジョーゼット、クレープ、デシンなど) を通して女性の身体の美しさを現した。スタイルとしては19世紀の初めにイギリスで流行したシュミーズ・ドレスのリバイバルで、シルエットは全体に単純でルーズなものである。

この頃から、しだいに消費者の志向するものが多様化してきて、一つのシーズンを一つのシルエットによって、それを流行の基本パターンとすることができなくなり、服装に対する従来の概念は、大幅に変わってきた年代でもある。

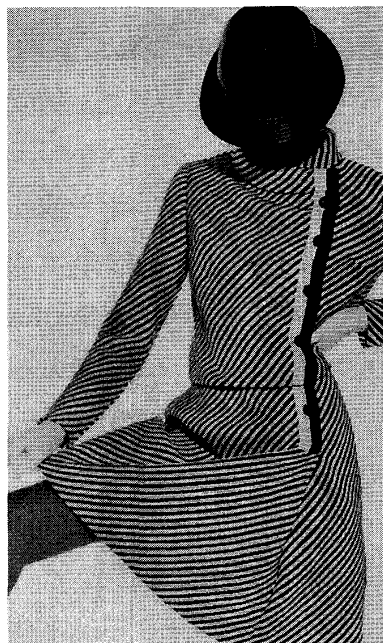
## 5. 多様化されたシルエット

これまでのファッションは伝統的な原則を継承して、デザインの表現は全体のシルエット、ディテールの変化によっていたが、70年代から80年代にかけてはファッションの価値観が複雑で、多数のシルエットが同時進行で展開され変化をもたらした。すなわち多種多様な表現要素によって中にはアートの感覚に近づく傾向のものもみられた。

70年前半の基本的なシルエットは、Aライン調で、「プリンセス・ライン」、「テント・ライン」、「シュミーズ・ライン」などで、肩はナチュラルなラインで胸は小さく、ウエスト・ラインからフレアーが流れるエレガントな感覚のものが支流であった。

また、この時期に他のファッションも数多く展開された。それは既存のファッション・ルー

写真 18 オプ・アート風の作品  
(1965 年)



ルにとらわれない独創的な着こなしと個性を主張することが普及し始め、それを象徴する代表的なものとして、Tシャツ（もともとは下着であった）とジーンズ（労働着）の一般化、レイヤード・ルック（重ね着）、フォークロア・ルック（民族衣裳にイメージを求めたファッション）、アーミ・ルック（軍隊調の服）、ワーク・ルックの流行である。

レイヤード・ルックやフォークロア・ルックはマキシやミディといったロング丈の流行をもたらしながら、身体を束縛しないファッションを女性達に与え、それが「ビッグ・ファッション」（布地をたっぷり使用して、オフ・ボディの大きくゆったりとしたシルエット）につながり、再び肩を強調するシルエットが打ち出されたり、さらに「アン・コンストラクテッド・ファッション」（形にこだわらない）の流行となり、ファッションの個性化現象が現れてきた。

したがって、ビッグでワイドな肩の表現のためにパッドを入れたり、ウエストを様々な方法でマークするなどの工夫がされた。

ファッションは多様化、個性化、アンチ・モードの時代に入り、カジュアル化が進むことによって、オート・クチュールはその勢力を失うかの如く存在が薄れていった。

その反動で既製服がファッション界に幅を利かせるようになってきた。オート・クチュールを手掛けたデザイナー達によって、そのブランド名が付けられることで高級既製服（プレタポルテ）として大衆に受け入れられるようになった。

70年中頃のファッション・アイテムとして話題となったのはスカート丈で、ロンゲットのミディ丈、マキシ丈が全体の70%近く占める程になり、女性らしい優雅な伝統美が追求された。

スカート丈が長くなると機能面からスリットの必要性も考慮されて、それがデザインに生かされ、全体のシルエットとしてはスレンダー（細身）なものと、オフ・ボディ（身体から離れている）が共存している状況である。

70年後半になると再びしっかりと仕立てられたスリムやストレートのシルエットを持つ「クチュール・ファッション」が注目されるようになり、その後女性の肩、胸、腰そして脚線の存在を明確にした「シェーブ・ファッション」へと変遷して、クラシックなスタイルの再登場となる。この時代になると女性達はただ流行を追い掛けることはなく、各自の好みの装いをする傾向となる。

## 6. アンチ・クチュールと現代

1980年代は感性の時代で、ファッションは70年代に引き続き多様化であり、ファッション・マーケットなどは細分化し、さらに大衆ではなく分衆の時代に入る。

80年代はミニの復活とパンツの多様化、未来志向的なアブストラクト（抽象的）なものである。ミニは60年代のハードなものと違って、ソフトでデザインにも時代の変化が顕著に現れて様々なものがみられた。

スタイルも、型を重要視した構築的（コントラクテ）なシルエットと非構築的（デ・コントラクテ）なシルエットの共存であり、前者は肩にパッドを入れて誇張させ、ウエストは細く締め、腰はフィットさせることをポイントとしたクラシックなフォルムを主流としている。後者

はシンプルで機能的な直線裁ちのものが多数である。

また、「マスキュラン・ルック」(マスキュランは男性的なという意味)が一部の女性に好まれ、ベスト・ネクタイなどで男性的な要素をどこかに取り入れるファッションで、シルエットはナチュラルなものであった。

83年頃には世界的に日本ブームが起こり、それに伴って日本人デザイナーが、「ジャパネスク・ファッション」(主に和服のディテールや日本的な色調、模様など日本趣味を強く打ち出したファッション)を海外に紹介して高い評価を得ることが多くなった。写真19は和装のシルエットを現代風にアレンジしたもので、「ドテラ・ルック」といい、ウールの丹前(ドテラ)用素材を使用したコートとワンピースであるが、シルエットは「オフ・ボディ・シルエット」に該当する。それらは独特なシルエットを表現して、女性のボディは殆ど無視したかのように、布を巻き付ける、振じる、裏返す、くぐらす、結ぶ、羽織る、といった扱いであった。

他の傾向としては、アンチ・クチュール(縫製のない意味で、直線仕立て、切りっぱなしなど)、フォークロア調、レイヤード・ルック、ノン・ルールなどである。

しかし、一方ではウエストを絞ったボディ・コンシャスなシェイプしたシルエットも復活したり、「アンドロジナス」(男女の服装の無差別化)も話題になる。

80年代後半になると、シルエットは再びナチュラルなものなり、ほっそりしているが適度なゆとりのある直線的なものと、ゆったりとしたビッグなものであるが、この時期のスカート丈は、ふくらはぎを被う長さのカッシュモレ丈が主流で、ショルダー・ラインもナチュラルになり、スモール・ショルダーも登場して、一時的に女性らしさへの回帰がみられた。

1990年代に入ると「エコロジー」という言葉がファッション界でも取り上げられ、ファッションも地球規模で考える時代に入った。いわゆる「エコロジー・ファッション」(エコ・ファッション)で、色彩はアース・カラーであったり、素材も環境に優しい天然の布を使用したり、柄ではアニマル・プリントなどが上げられる。リサイクル・ファッションもエコ・ファッションの一つと考えられる。

この時期のシルエットは、様々であるが自然なほっそりとしたロング丈が主流であり、ミニのバリエーションも豊富で、これと決定することができない状況である。

したがって、洋服を個性表現の手段としてとらえる方向性が顕著になり、自分の好みや性格、心理状態に合わせてファッションを選択する傾向になった。

その中でも特徴的なアイテムを上げてみると、ミドリフ・トップ(ミドリフとは横隔膜の意味で、みぞおちやお臍が見える程の短い上着丈のこと)、トランスペアレント(透明な、透き通っ

写真 19 ドテラ・ルック  
(1983年)



たという意味でシー・スルーと同意語)な素材(シフォン, オーガンジー, ボイル, レース, ジョーゼット, ゴースなど)使いなどで, それらは肌やボディ・ラインを見せることで, 女性らしさや優雅さを表現する。その他の素材も多様になり, 光沢のあるもの, コーティング加工されたもの, 玉虫色のもの, 透明感のもの, サテンやベルベットの柔らかい光沢のものなどデザインによって使い分けられている。

袖のデザインも豊富になり, ベル・スリーブ(上腕は細く袖口がフレアになっている袖), エクストラ・ロング・スリーブ(指先がすっかり隠れる長さの袖), ドロップ・カフス(袖先に垂れ下がったカフスの総称), ダブル・カフス(カフスが折り返って二重になった袖)など様々なバリエーションがシンプルな身頃のシルエットにアクセントを付けている。

この時期には再びパンツのシルエットが多彩になり, 代表的なものにテイパード・パンツ(腰のあたりではゆったりと, 足首に向かってしだいに細くなるもの), バギー・パンツ(腰から裾までだぶだぶで幅広のもの), タップ・パンツ(ショート丈で, オーバー・スカートと合わせたもの)などが見られた。

1994年頃にはドレスのバリエーションも変化に富み, マイクロ・ミニなどとは対照的な「フロー・ライン」(刀の鞘など細長いシルエット), または「シース・シルエット」で, トルソーへのフィットを意識したミディ丈の女性らしいシルエットも再び着用されるようになった。

1995年になると, ベルテッド・スタイル(ベルトを締めたスタイル)が世界的に流行し, ベルトは細いもので, ウエストをマークして強調されている。ベルトはベルト幅の違いによっていつの時代にもファッションのポイントとして重要視される付属品である。

ヤング・ファッションとしては, チビピタTシャツ(身体にフィットしていて袖丈, 着丈の短いもの), ミドリフ丈のトップで臍だしルックも話題になる(写真<sup>10)</sup>20)。また, トラペーズ・シルエットのシュミーズ・ドレスあるいはスリッパ・ドレスが流行し, もともと下着だったものが若者達によってアウター化された。

その一例として, 60年代に見られたオプティカル・ファッションやミニのワンピースをパンツとコーディネートしてチュニック風に着こなす方法など, ファッションを新しい感覚でとらえている(写真21)。

写真 20 ヤング・ルック

(1995年)

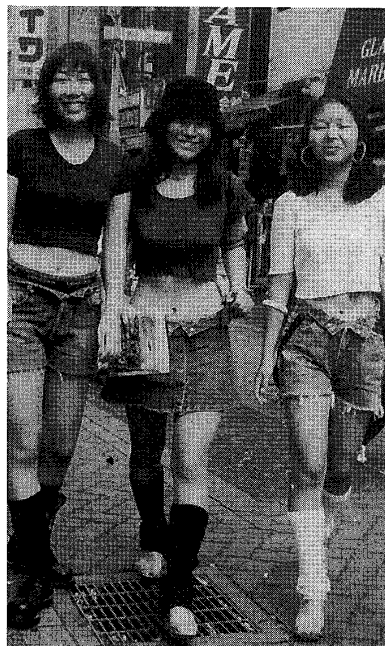


写真 21 チュニック風のコーディネート (1996年)



オプティカル・パターンを使用するときは、その視覚的效果を妨げないように柄の大きさ、着用した時点での身体の動き、シルエットを計算してシンプルなデザインにすることが望ましい。また最近の傾向として、CGパターンによる幾何学模様やモンドリアン・ルックを思わせるカラーブロックのパーツを組み合わせた柄も多く取り上げられていることが注目される。

1996年のシルエットの特徴は70年代風ティストで、マイクロ・ミニも多数デザイン化されたり、シルエットも様々であるが、その中でもロンジリーニュ、あるいは「スティック・ライン」、「ロング&リーン・シルエット」(写真22)の細く長いシルエットが多くみられ、これらのシルエットは比較的オフ・ボデイのシルエットで全身を“ながく”みせることがポイントである。それは1994年頃に流行ったシース・シルエットと同型だが、スカート丈の長さに違いがみられる。シース・シルエットのスカート丈はミディ丈であるが、ロング&リーン・シルエットは

60年代後半に流行したマキシ丈であり、多数のシルエットが氾濫する中で興味深いものである。もう一つのトレンドとしてソフト感覚のミリタリー・ティストがあげられるが、シルエットは細身で女性的な傾向で、以前のような構築的なものとは異なり、肩幅は狭く、肩章、フラップポケット、パッチポケットなどがデザインされ、太めの共ベルトなどのアイテムで現代的に应用、展開されている。

素材に関しても、90年代に入ってから流行が引き続いて、光る(エナメル、ビニール、ラミネートやパール加工、シルク、シャンタン、ペロアなど)、透ける(レース、シフォン、オーガンジー、ゴースなど)、伸びる(ストレッチ、バンロン、ジャージ、ニットなど)がトレンドである。また本来なら捨てられるものに新たな価値を見だし素材として使用されているものもある。

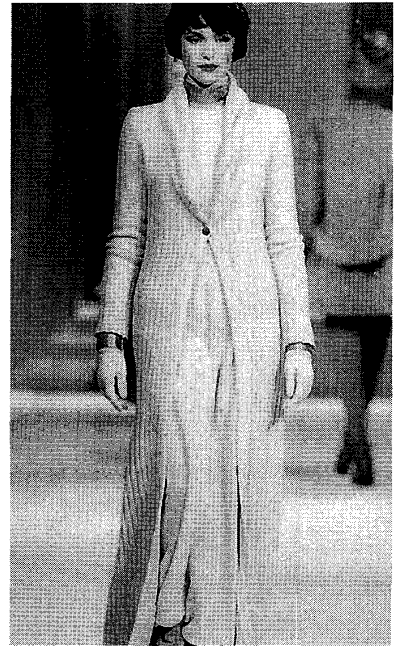
たとえば、セシリン(生糸から絹を生成する時に不必要な成分)をパウダー状にして、糸表面に付着させることで繊維の吸水性などを高めるものや、キトサン(蟹の甲羅から取れるキチン質を成分とするもの)を繊維化したものなどで、いずれも蛋白質であり、またテンセル素材も木質セルロース(木質から不純物を取り除いたもの)で化学変化によるものではなく、天然素材のリサイクルによって作り出されたものである。

このように素材も豊富になった現在は、素材の時代、質感の時代に適合して洋服のシルエットを構成する上で、製作者の意図とするところを可能にしてくれると思われる。

### III ま と め

1930年代のシルエットは女性的な曲線をデリケートに表現する「スリム・アンド・ロング」の傾向であった。第二次世界大戦の前後は「ミリタリー・ルック」が一時期みられ軍服調では

写真22 ロング&リーン・シルエット (1996年)





あるが、シルエットはナチュラルなものである。

1940年代は第二次世界大戦の影響を著しく受けた時代で、30年代に引き続きミリタリー調のシルエットが主流であったが、40年代中頃にクリスチャン・ディオールによって、「ニュー・ルック」が発表され、シルエットとしては肩をなだらかに、ウエストをマークして細さを誇張し、広がったスカートが特徴で、女性らしさへの復活がみられた。

その後は、1950年代中頃までディオールの発想によって様々なシルエットが発表され、ニュー・ルック以後はアルファベット文字のシルエット名が付けられるなどして「ライン時代」をつくり、多様なシルエットを見せたがそれらはファッド(短時間で消え失せる)なものであった。その中でも同年代の「サック・ドレス」は、ウエスト・ラインをマークしない開放的なシルエットで、マス・ファッションとして、各デザイナーによって若干デザインを変えながら多数の女性に受け入れられた。

1960年代になると第二次世界大戦後のベビー・ブームの余波で、若者がファッションのリーダー的存在になって、活動的なミニ・スカートが時代の象徴として登場し若者文化の隆盛をうながしたが、現代においてはミニは流行ではなく、一つのファッション・スタイルとして定着している。

この時代のヤング主導型と思われるファッション・アイテムは「ジーンズ・ファッション」、「アーミー・ファッション」、「ヒッピー・ファッション」、「モッズ・ファッション」、「シー・スルー・ファッション」と多彩であった。

1970年から1980年代にかけては働く女性の増加と、ヤング・ファッションがさらに幅をきかせたことにより既製服の需要が拡大してファッション事情もハイ・ファッションからマス・ファッションに移行し始め、女性の服装に対する価値観も変化し始めた。

またデ・コントラクテな「イージー・ジャケット」、「ロング・ブレザー」、「パターン・オン・パターン」の柄物扱い、「アンドロジナス」、「スポーティブ・エレガンス」、「パンク・ファッション」、女性的な「ボディ・コンシャス」などがみられ、さらにパンツのバリエーションも数多く、レディス・ファッションの多様化時代であった。

1990年代になると地球環境の問題が浮上し、したがってファッション界も自然に対する意識が強まり、素材、デザインにその傾向が顕著に現れた。シルエットは誇張しないナチュラルなもので、余分なディテールを排除したデザインが多くみられる。

96年代は1960年から1970年代調のものが新しい感覚で若者達に受け入れられ、シルエットは直線的で、その代表的なものは、「ロング&リーン・シルエット」、「スレンダー・ライン」、「ミニ・トラペーズ・ライン」であるが、ミニとロングの共存の時代になっていて、シルエットも固定観念にとらわれず、それぞれ自由に取り入れられている。

シルエットは身頃全体が「フル」(広い)か、「スリム」(細い)か、ウエストをマークするか、ルーズにするか、スカートの丈が長い、短い、スカート・ラインがフルかスリムかということが基準になって周期的に繰り返される傾向がみられ、一貫してショルダ、バスト、ウエスト、

ヒップがデザイン・ポイントの的となり女性のボディにこだわることで創造されていく。過去に流行したシルエットが今取り上げられるのは、それが今の時代に適していると感じ取れる。

現在ファッションを取り巻く情報は時代と共に変化している。テレビに代表されるマス・メディアの拡大、雑誌媒体の細分化によって、誰でも同時に世界のファッション情報を受け入れることが可能になり、ナショナル・ブランド、インポート・ブランド、デザイナーズ・ブランドと多様化したファッション・スタイルが、女性のワード・ローブにかなりの影響を及ぼしている。

写真 23



1930年代から今日までに殆どのシルエットが出尽くした状態であるが、今後はデザイナー達によって既存のシルエットに様々な素材を使用し、バリエーションも工夫されることであろう。

また、カオス（混沌）の時代に相応しく定型なきデザイン、単一性にとらわれない価値観の多様化が見られると思われる。

これからの時代は、過去の様々な時代に代表的される女性像とファッションを媒体にして、自己表現をし、また自己演出ができるものであり、それぞれの感性によってファッションが確立していくものと予想される。

## IV 作 品

今シーズンの流行にみられるトレンドの中に、「ロング&リーン・シルエット」でマキシ丈のアイテムが多くみられるが、それをテーマとして取り上げ、ワンピースとケープをアンサンブルにしたタウン・ウェアを製作した（写真23・写真24・写真25）。

### 1. 素材

ロング&リーン・シルエットに適する素材は、着心地のよさや機能性からみると伸縮自在のストレッチ素材が適当と思われ、表素材には、モナベール・ストレッチ（ポリエステル63%、毛32%、ポリウレタン5%）の黒地と白地を使用した。

芯地にはダンレーヌ R 111（身頃用）、ハスケル 003（ライニング用）、ケープのトリミングに

写真 24

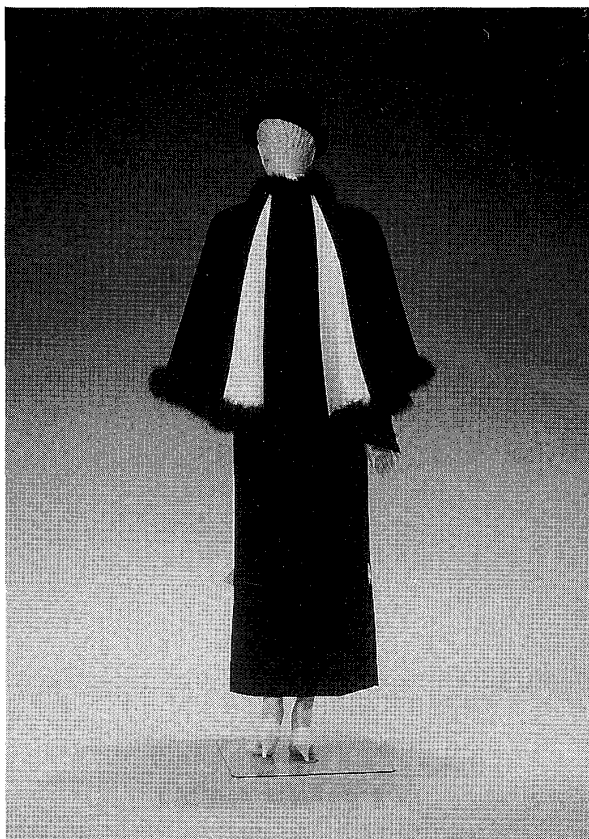
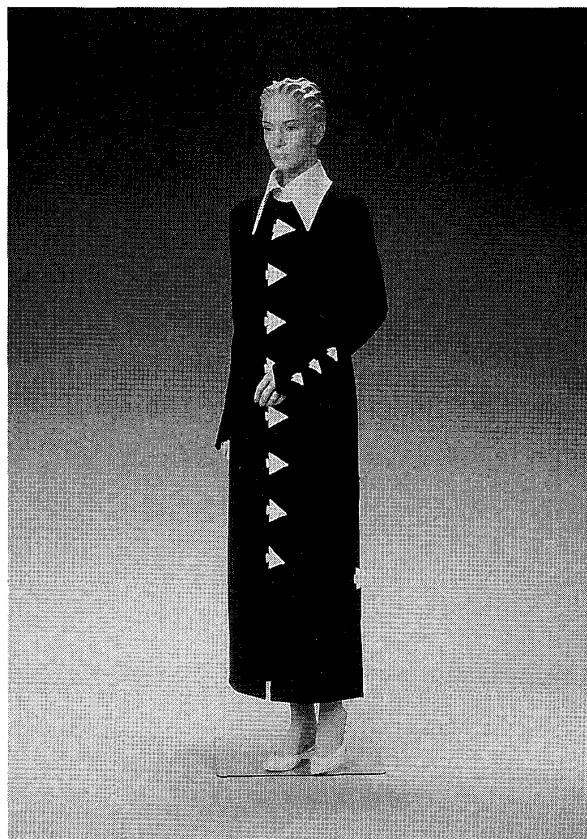


写真 25



はマラボーを取り扱った。

## 2. デザイン

ワンピースは、ロング&リーン・シルエットで、ボディのなだらかな曲線を意識し、機能性を考慮してサイドには深いスリットを施した。袖はタイト・スリーブで丈は手の甲までの長いものである。

色調は黒を主体として白をアクセントに取り入れて、二色のコントラストを表現した。前身頃フロントのボタン付け位置、サイドのスリット部分、スリーブの袖口部分、ケープのボタン付け位置には白地で三角形のタブ（飾り布）を装飾を兼ねてポイントとし、さらにその上には三角型の白いボタンを使用して立体感を出した。カラーにも白地を用いて、大きめのスタンド・アンド・フォール・カラー（台衿付きのショール・カラー）をデザインした。

ケープはテント・シルエットで、前身頃、後身頃全面にはハスケル 003 をライニングをすることでボリュームのあるフレアーのシルエットを保った。また縦に白地で放射状に切り替えを入れたり、ヘムもシャープな斜めのラインにすることで裾広がりのシルエットを強調し、ネックラインとヘムラインにはマラボーでトリミングを施すことによって女性らしさを表現した。

ワンピースの「スリム」とケープの「フル」の対称的なシルエットの組み合わせで全体をまとめた作品である。

## 参 考 文 献

- 1) 千村典夫：ファッションの歴史，鎌倉書房，1993
- 2) 村上憲司：概説西洋服飾史，関西衣生活研究会，1982
- 3) ブリジット・キーナン：クリスチャン・ディオール，文化出版局，1988
- 4) 青木英夫・メイ S・青木：目でみる女性ファッション史，衣生活研究会，1987
- 5) 上田安子：バレンシアガ，学校法人・上田学園，1990
- 6) 南 静：パリ・モードの200年Ⅱ，文化出版局，1991
- 7) 林 邦雄：戦後ファッション盛衰史，株式会社源流社，1987
- 8) VALRIE MENDES：Pierre Cardin，東京学術出版株式会社，1990
- 9) 三宅一生：三宅一生の発想と展開，株式会社平凡社，1985
- 10) 千村典夫：時代の気分を読む，株式会社グリーンアロー出版社，1996
- 11) 大内順子：流れと人，朝日新聞社，1987